

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530161

研究課題名(和文) 公共政策決定過程における「やらせ」の発生要因の研究

研究課題名(英文) Yarase process in public policy-making

研究代表者

宮脇 昇 (Miyawaki, Noboru)

立命館大学・政策科学部・教授

研究者番号：50289336

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：「やらせ」の政治的演出は情報の不完備性に依拠している。「やらせ」を命じる政治的演出者と「やらせ」を見る観客の双方に共通知識があたかも(as if)存在するかのごとく演出されるが、現実には観客の有する情報は限定的・選択的ではない。被操作者は必ずしも完全な知識を有さない。情報の不完備性・非対称性が政治的演出としての「やらせ」を可能にし、公共政策の政策過程の循環を演出者の意図にそって進行させる。また非民主主義国では「やらせ」を内在化した情報操作が権力維持のために恒常化している。しかし世界的な民主化の波、インターネットの普及、情報公開制度の拡大により、成功的演出の条件が困難になった。

研究成果の概要(英文)：Political theatrics of produced set-up of faking ("Yarase") is based on incomplete information. It seems as if common knowledge exists between political interpreters and audiences about the produced fake. However, the audiences are easily deceived, because an audience's information is limited and selective in the real life, with incomplete information. Incompleteness and asymmetry about information realize the produced fake as political theatrics, and this faking propels the cycle of political process in public policy, which political interests desire. In addition, information control including the fake enforces constant keeping of power in non-democratic states. Nevertheless, the qualification of successful theatrics for fake becomes more difficult than in the past, because of the global wave of democratization, the diffusion of the internet, and the extension of the information disclosure system based on the principle of transparency.

研究分野：政治学、経済学、倫理学、法学

キーワード：やらせ 政治過程 民主主義 民主化 公共政策 透明性 虚偽

1. 研究開始当初の背景

公共政策における「やらせ」の発生環境の分析を進める際に、「不完備情報」「政治的演出」の2点を中心に本研究における基礎的な分析枠組みを構想した。不完備情報ゲーム論は、社会科学で既に確立したモデルとなっている。しかしそのモデルは対等な二者を想定しているものであり、国内の公共政策過程に見られる非対称的な権力関係とは趣が異なる。

2. 研究の目的

「やらせ」がどのように「発見」され、演出され、破綻におこまれるかを、多様な時間・空間の事例をもとに政治学・経済学を中心に学際的にとらえる。特にこれまでの規範論・過程論が射程におさめていなかった「やらせ」を生む事象を新たな知の体系として「やらせ」の政治経済学と位置づけることに特徴がある。

3. 研究の方法

民主主義の世界においてやらせという支持調達の方法がなぜ用いられるのか、成否の分水嶺はどこに存するのかを問いとして、少ない発覚事例をもとに研究の分析視角を提示する。最後に、脱やらせ政治を目標に社会的に公正な決定過程の環境について検討する。

4. 研究成果

「やらせ」に関し、これまでは慣習的にある程度許容されてきた「やらせ」でさえ、近年では社会的に許容されなくなっている。九州電力の玄海原発の再稼働をめぐる説明会で発覚した「やらせメール」の問題は記憶に新しい。民間企業とはいえ、公的性格の強い地域独占企業が、県知事の示唆をえて世論の支持調達のために関係者に市民を僭称させて「やらせ」を行うことが倫理的に許されぬことは言を俟たない。しかしこうした「やらせ」は、認知件数こそ多くないが未発覚事例は少なくない。例えば玄海原発の問題を契機に他地域の原発の説明会でも類似の事例が数件あったことが発覚している。原発以外の争点でも小泉政権下でのタウン・ミーティングで発覚した「やらせ質問」問題(2001年、青森県)では内閣府がやらせ質問を誘導した。このように「やらせ」は暗黙知のレベルでは一定の条件下で容認された方法であると考えられる方が説得力がある。

国内の行政組織が「やらせ」を放置・容認していたのと同様に、国家間関係や非民主主義諸国においても「やらせ」が横行している。例えば1990年代に韓国の総選挙を前に政権与党が支持率を高めるために北朝鮮に軍事境界線付近での軍事的挑発行動を行うように秘密裏に依頼していたことが明らかになっている。民主主義国たる韓国が対外政策として「やらせ」を選択したのはなぜか。J.MearsheimerのWhy Leaders Lie (Oxford University Press, 2011)が著して

いるように、政治家と外交官は嘘をついたことにより罰せられることは滅多になく、特に他国に対して虚言を発した場合はなおさらである。また現実に政治的な演出が非民主主義国を経由する場合、それを演出であることを証明すること自体が困難である。この場合に「やらせ」の成功率は高まる。

これらの「やらせ」の政治的演出は、情報の不完備性に依拠している。すなわち「やらせ」を命じる政治的演出者と「やらせ」を見る観客の双方に共通知識(common knowledge)があたかも(as if)存在するかのごとく演出されるが、現実には観客=被操作者(大衆)の有する情報は限定的・選択的ではない。被操作者は、選択可能な行動、利得、進行などについて必ずしも完全な知識を有さない。このような情報の不完備性・非対称性が政治的演出としての「やらせ」を可能にし、公共政策の政策過程の循環を演出者の意図にそって進行させる。まさしく「何を知らないかを知らず、何を聞くべきかが分からない」(Mearsheimer)という状態に聴衆はおかれているのであると想定され、観衆費用はゼロである。また非民主主義国では「やらせ」を内在化した情報操作が権力維持のために恒常化している。北朝鮮では、政治的支持調達の手段として政治的記念行事に大衆を動員したマスゲームが展開され、大衆に自発的な参加の自覚をもたせることに成功している。かつてのソ連も同様に、プロパガンダを社会的に浸透させることで「やらせ」の被操作者である大衆・国民自身が相互監視を通じて演出の過程に組み込まれていた。

しかし世界的な民主化の波、インターネットの普及、情報公開制度の拡大、加えて日本国内では公益通報者保護法による内部告発制度の普及により、公開性・透明性の原則重視により各国の公共政策の政策過程が再編成されている現在、成功的演出の条件が困難になるばかりか、演出性の存在自体が批判されている。従来「やらせ」の温床となってきた秘密会合や「根回し」が徐々に敬遠されつつある。「やらせ」等の演出によって観衆費用を抑制しようとする方法は、一つの転換点に差し掛かっている。

また「やらせ」の周辺事象として政治的・社会的不正への批判も高まっている。2014年に入ってからSTAP細胞をめぐる議論や、地方議員の出張に関する会見、大臣経験者の政務活動費の不明瞭な支出など、「やらせ」の周辺事象が従来にも増してより注目されている。国際政治における「やらせ」の周辺事象に関しても、同様のことが言える。選挙監視を例に挙げると、旧ソ連圏での選挙監視に関し当局は選挙を国際基準に準拠して実施していると主張し、EUなどの国際機関は国際基準に満たないものであったとしても、それを信じる「ふり」をしている。しかし近年ではこのある種の「やらせ」が問題となりつつあり、新たな基準策定などの対応がなされて

いる。

やらせでは、演出者が直接観衆を説得することなく、協力者の演技を媒介して言説や行為の正統性を確保する。演出者にとって一見不合理な方法であるにもかかわらず、演出者がやらせという粧いを取って用いねばならないのは、演出者にとって当該課題は公開の議論を通じた合意形成や支持調達が困難であるためである。情報の不完備性（非対称性）が政治的演出としてのやらせを可能にし、公共政策の政策過程の循環を演出者の意図にそって遂行させる。やらせの演出は、観衆費用を抑制する方法であり、演出者に評価されたと考えられる。

やらせの環境に必須なのが、演出協力者の存在である。演出者と協力者は、共同でやらせの目的を達成するべく、情報操作に積極的に荷担し、いわば同盟関係にある。この演出者 - 協力者間の長期的関係が存在せず、協力者 - 客観関係が良好な場合、やらせは功を奏せず、未然に防止されうる。ゲーム理論を用いれば、協力者が演出者との間で繰り返しゲームではなく一度きりのゲームに参加していると認識している場合、裏切りのインセンティブは高まる。

やらせの争点は多様である。倫理によって、演出者と協力者の関係は制限される。逆に言えば、やらせの成功は、両者あるいは一者の倫理的観点が薄いことに依る。公正の観点から倫理を求めるのはそもそも容易ではない。多角的考察をふまえ、下記の結論が導かれる。やらせは、三つの条件によって成功しうる。まず、演出者と観衆との関係においては情報不完備性が必要である。第二に、演出者と協力者の関係では、両者の安定的地位に基づく長期的同盟関係が求められる。第三に、演出者や協力者に公正に関する職業倫理が薄いことである。やらせを成功させずに、民主的な公共政策決定過程を実現するには、この三点が必要となる。

以上の内容を本科研費の成果報告として、『やらせの政治経済学』と題してミネルヴァ書房より出版した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

近藤敦、玉井良尚、宮脇昇、ゲーミング & シミュレーションの開発を通じた国際公共政策の理解と学習、政策科学、査読無、23 巻、2016、pp.229-245

後藤玲子、災害カストロフィにおける個人の『福祉』と『公共性』、海外社会保障研究、査読無、Autumn、2014、p.38

Reiko Gotoh, "The Equality of the Differences---Sen's critique of Rawl's theory of justice and its implication for Welfare Economics,"

History of Economic Ideas, 査読有, 65.2 (2014), pp.140-155

Reiko Gotoh, Justice as Reciprocity Reexamined in the context of Catastrophe, 言語文化研究、査読有、24 巻 4 号、2013、pp.33-42

横田匡紀、グローバルな公共性と地球環境ガバナンス：地球環境ガバナンス改革と気候変動ガバナンスを事例として、公益学研究、査読有、13 巻 1 号、2013、pp.49-59

[学会発表](計 18 件)

Masataka Tamai, Atsusi Kondo, Noboru Miyawaki, "ISAGA 2015 Annual Conference: Understanding the History of International Politics: A Retrospective and Repeated Type of Gaming and Simulation in the classroom" July 20, 2015, Kyoto: Ritsumeikan University

宮脇昇 平和と民主主義の調和への困難な道程：1975-2015 ヘルシンキ・ウランバトル・ヒロシマ、日本平和学会、2015 年 7 月 18 日、広島アステールプラザ(広島県)

Noboru Miyawaki, "Jagiellonian University Security Conference 2015: 40-Year History of CSCE/OSCE for Russian Neighbors in Asia" June 19, 2015, クラクフ(ポーランド)

Masataka Tamai, "Jagiellonian University Security Conference 2015: 40 Years of OSCE from an Asian Perspective" June 16, 2015, クラクフ(ポーランド)

Noboru Miyawaki, "Joint Workshop of IFSH and Ritsumeikan University: The Extended OSCE and Revival of OSCE" June 16, 2015, ハンブルク(ドイツ)

Noboru Miyawaki, "Northeast Asian Energy Connectivity Workshop: Promoting Connectivity between Russia and Japan" March 18, 2015, ウランバトル(モンゴル)

宮脇昇 国際公共政策、グリーン成長とエネルギー環境政策ワークショッププログラム(招待講演)、2015 年 1 月 31 日、大連(中国)

清水直樹 クライエントリズムと金融政策：都道府県別政府系金融機関の融資データの分析、日本政治学会、2014 年 10 月 4 日～2014 年 10 月 5 日、早稲田大学(東京都)

宮脇昇 ゲーミング&シミュレーションを通じた国際政治の理解、日本公共政策学会、2014 年 6 月 7 日、高崎経済大学(群馬県)

Masatoshi Yokota, "International Studies Association: Norms, Actors and

Double-edged Diplomacy in Global Environmental Governance: A case of Japan's climate change policy" March 26, 2014, Toronto, Canada

Reiko Gotoh, "Justice, Responsibility and Risk: Risk as a Viewpoint and Public Reciprocity" March 19, 2014, Kyoto: Ritsumeikan University

Masatoshi Yokota, "Southern Political Science Association 85th Annual Conference: Globalization and global environmental governance: A case of Japan's climate change policy" January 9, 2014, New Orleans, USA

宮脇昇 グローバル公共政策、2013年5月24日、大連(中国)

Masatoshi Yokota, "International Studies Association: Conflicting Norms in Global Environmental Governance" April 6, 2013, San Francisco, USA

宮脇昇 グローバル・ガバナンスにおける(as if game)、グローバル・ガバナンス学会、2013年4月6日、立命館大学(京都府)

宮脇昇 "Can Asian who glanced at the 1989 get through the future challenges?" 第1回「アジア共生」ジョイントコンフェレンス(招待講演)、2013年1月12日、東京外国語大学(東京都)

横田匡紀、地球環境政策と規範競合、日本公共政策学会、2012年6月16日、立命館大学(京都府)

玉井雅隆、選挙監視とウソ OSCEにおける選挙監視メカニズムの成立とその受容過程、日本公共政策学会、2012年6月16日、立命館大学(京都府)

〔図書〕(計 8 件)

玉井雅隆、後藤玲子、宮脇昇、ミネルヴァ書房、「やらせ」の政治経済学、2017、200p

横田匡紀、弘文堂、「地球環境問題をどう解決するのか」佐渡友哲、信夫隆司編『国際関係論【第2版】』2016、278p

宮脇昇、晃洋書房、「グローバル公共政策と公共財」庄司真理子、宮脇昇編著『新グローバル公共政策』2016、pp.12-22

宮脇昇、晃洋書房、「サミットと国際レジーム」庄司真理子、宮脇昇編著『新グローバル公共政策』2016、pp.81-91

山本武彦共著、青灯社、集団的自衛権とイスラム・テロの報復、2015、441p

Dumouchel P. and R. Gotoh, "Social Bonds as Freedom" Berghahn Books, 2014, 296p

後藤玲子、ミネルヴァ書房、福祉の経済

哲学、2014、408p

玉井雅隆・宮脇昇編、晃洋書房、コンプライアンス論から規範競合論へ、2012、204p

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮脇昇 (MIYAWAKI, Noboru)
立命館大学・政策科学部・教授
研究者番号：50289336

(2) 研究分担者

山本隆司 (YAMAMOTO, Ryuji)
立命館大学・政策科学部・教授
研究者番号：10150765

横田匡紀 (YOKOTA, Masatoshi)
東京理科大学・理工学部教養・准教授
研究者番号：20400715

清水直樹 (SHIMIZU, Naoki)
高知県立大学・文化学部・准教授
研究者番号：20508725

西出崇 (Nishide, Takashi)
京都外国語大学・外国語学部・特任准教授
研究者番号：30513171

後藤玲子 (GOTOH, Reiko)
一橋大学・経済研究所・教授
研究者番号：70272771

藤井禎介 (FUJII, Tadasuke)

立命館大学・政策科学部・准教授
研究者番号： 70350931

玉井 雅隆 (TAMAI, Masataka)
立命館大学・政策科学部・非常勤講師
研究者番号： 60707462

山本 武彦 (YAMAMOTO, Takehiko)
早稲田大学・政治経済学術院・名誉教授
研究者番号： 10210535

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
()